婦人と子ども

第六卷第拾號

子供と秋の自然界

暑い暑いと言ひ暮らした夏の日も、過ぎて見ればつかの間で、何日か肌涼しい秋の景色となつた。春の景色の麗かさはないにしても、一年中、清らけき天地は實に昨今の自然界である。爛熟たる春の花は見られないが、清楚たる野邊の千草は又一段の風趣がある。

幼稚園の創設者フレーベルといふ人は、子供を教養するに、少くとも一日の中一時間、一週の中一日は野外に連れて出て、自然の間に自然界と接觸させたいと言はれた。この事は子供の教育上精神上に取つても必要だが、殊更身體上に取つて極めて必要である。田舍の子供が顏の色から身體中、赤黑くつて、生々した血に充ちて全體逞しく出來て居るのに比べると、東京の子供は、大低は青白くつて貧血で神經過敏に出來て居る。肉色のよい子供は實際まことに少ないのである。而してこれを醫すに、最も有効な方法は、なるべく自然界の間に遊ばせることである。その時は、何時でも宜いが、就中今の時が最も適當である。で、東京の樣な都會に樓む吾々は、若し一日一時間といふことが出來ねば。一週の中土曜日曜丈けでもよい、この清らかな昨今の自然界と愛らしい子供等とを接觸させたいと思ふ。電車なり汽車なりを利用すれば、隨分遠くへ出られるから。（牧羊）